

旧約聖書における「和解」の語彙に関する試論

左 近 豊

序

本研究ノートは、青山学院大学総合研究所「キリスト教文化研究」ユニットで進められている「聖書における『和解』の思想」プロジェクトの一環として、旧約聖書における「和解」を論じるにあたって、これまで看過されてきた語彙と概念について、語義論的に探究するものである。

拙論「旧約聖書における「和解」(1)」で論じたように、パウロの「和解」概念は、語彙に限定すれば旧約聖書に起源を持たないものとされている¹。

パウロが用いるギリシャ語καταλλάσσωやκαταλλαγήといった「和解」に関する語彙はLXXにおいて、ごく限られた旧約文書にしか登場しない²。むしろ旧約聖書テキストと新約聖書テキストの間の時期（中間時代）の諸テキスト（「第2、第4マカベア書」やフィロ、ヨセフスら）に見いだされるものである。そのため、パウロの「和解」概念は旧約聖書起源というよりも、ユダヤ諸文献やギリシャ・ローマ世界に根源を有するとする理解がなされてきた。³

1 左近豊「旧約聖書における「和解」(1)」『キリスト教と文化』37号（青山学院宗教センター、2022年3月）参照。

2 類義語としてδιαλλάσσω（LXX 1Sam. 29:4 - MTではפצת。新約ではマタイ5:24に登場。）やἰλάσκομαι（LXX Ex.32:14 - פח, 2Kg 5:18, 24:4, Ps. 24:11, Lam3:42, Dan.9:19, 2Ch 6:30 - הלח, Gen. 32:20, Dt 21:8, Ps. 64:4, 77:38, 78:9, Pro. 16:14 - כפר, Mal. 1:9 - הלחなどにも登場。新約ではルカ 18:13 とヘブライ 2:17）

3 I.H. Marshall, "The Meaning of "Reconciliation"," in *Unity and Diversity in New*

ただし、旧約聖書に「和解」概念が存在しなかったわけでは勿論ない。むしろシャロームに至る「和解」の思想は旧約聖書全体に貫かれている。例えば、ヤコブとエサウ、ヨセフと兄弟たちとの葛藤の末の「和解」について、「和解」を現わす典型的な語彙は用いられていないにもかかわらず、内容において重要なテーマであることは言を俟たない。これについては、文芸学的方法を用いて解明されることであり、本研究ノートでは扱わない。

1. 旧約聖書における「和解」の語彙に関して

ここでは改めて、語彙のレベルの検証を行い、パウロ書簡も含めて新約聖書全体で用いられる「和解」概念に連なる可能性を有する、旧約聖書の「和解」の語彙について検討することを主眼とする。

ちなみに、A. バルレユング／C. フレーフェル編『旧約新約 聖書神学事典』は、「和解」を「贖い」の類語と捉えて論じている。ただし、その語義的根拠は希薄と言わざるをえない⁴。「贖い」と訳されるヘブライ語には、ゴーエール

Testament Theology: Essays in Honor of G.E. Ladd (ed. R.A. Guelich: Grand Rapids: Eerdmans, 1978), 117-121; J.A. Fitzmyer, *To Advance the Gospel* (New York): Crossroad, 1981), 164-165; R. P. Martin, *Reconciliation: A Study of Paul's Theology* (Atlanta: John Knox Press, 1981), 104-106; A.J. Malberbe, *Paul and the Thessalonians: The Philosophic Tradition of Pastoral Care* (Philadelphia: Fortress, 1987); idem, *Paul and the Popular Philosophers* (Philadelphia: Fortress, 1989); S.E. Porter, *Katallassw in Ancient Greek Literature, with Reference to the Pauline Writings* (Cordoba: Ediciones El Almendro, 1994), 39-76; P.A. Holloway, "Bona Cogitare: An Epicurean Consolation in Phil 4:8-9," *HTR* 91(1998), 89-96; L.L. Welborn "Paul's Appeal to the Emotions in 2 Coringhians 1.1-2.13; 7.5-16," *JSNT* 82(2001), 31-60; V.H.T. Nguyen, *Christian Identity in Corinth: A Comparative Study of 2 Corinthians, Epictetus and Valerius Maximus* (WUNT 243; Tuebingen: Mohr Siebeck, 2008)など参照。C. Breytenbachは、ヘレニズム文献の中でも政治的、軍事的な文脈における平和条約で用いられる語彙であり、神と人間の間の関係に関するような宗教的コンテキストにおける語彙ではない、とさえ論じる。また語源において「贖い」と「和解」には連関はないことにも言及している (C. Breytenbach, *Versoehnung: Eine Studie zur paulinischen Soteriologie* (WMANT 60; Neukirchen: Neukirchener, 1989), 40-83)。

4 A. バルレユング／C. フレーフェル編『旧約新約 聖書神学事典』(山吉智久訳) (教文

（「贖う」の意の動詞ガーアルの分詞）やキップリーム（「覆う」という動詞カーファルから派生した名詞複数形）などがあるが、これらをもって、「和解」と同義とは言えるかは、甚だ疑問と言わざるをえない。他にも、「悔い改め」「赦し」「回復」「償い」などの用語を「和解」と同義と考える者もいるが⁵、いずれも十全に「和解」を表すものとは言い難い。

ヘブライ語における「和解」の語義的根拠を求めるにあたって、一つの手がかりは、LXXにおけるギリシャ語の「和解」に相当するヘブライ語を探ることである。もちろん、ギリシャ語の「和解」概念とヘブライ語における「和解」概念の間に横たわる言語的、思想的、歴史的差異には留保が必要であることは言うまでもない。

新約聖書をひも解くと、先述のように、パウロは書簡で、*καταλλάσσω*や*καταλλαγή*を用いており、LXXで*καταλλάσσω*が用いられるのは4例が挙げられる。それらのうち、3例はIIマカバイ記に集中しており（1:5、7:33、8:29）、1例のみエレミヤ書 48:39（LXX 31:39）に登場する。このエレミヤ書での用法について、本研究では検討したい。

2、エレミヤ書 48:39（LXX 31:39）の文献学的考察

エレミヤ書 48:39（LXX 31:39）は、「モアブにたいする託宣」の文脈にある。これがLXX中唯一、*καταλλάσσω*が登場する例であるが、この例には本文上の問題が立ちだかる。その問題を明確にするために、まずはMTとLXXを比較しよう。あえて語順に即して直訳的に訳出し、問題点を浮き彫りにする。MTとLXXの相当する語は枠線で囲んで対応箇所を示している。

館、2016）609-610頁。

5 W. J. Wessels, "Return to the Lord your God, for he is gracious and compassionate..." (Jl 2:13), A Prophetic Perspective on Reconciliation and Restoration," *Verbum et Ecclesia* 26, 1 (2005), 310.

MT

איך חתה הילילו איך הפנה ערף מואב בוש והיה מואב לשחק ולמחנה לקל־סביביו:
How shattered it(fs) is! They wail. How Moab turned (his) back! He was ashamed.
And Moab will become a laughingstock and a horror (to) all around him.

LXX

πὸς κατήλλαξεν: πὸς ἔστρεψεν νῶτον Μωαβ; ἠσχύνθη καὶ ἐγένετο Μωαβ εἰς γέλωτα
καὶ ἐγκόστημα πᾶσιν τοῖς κύκλῳ αὐτῆς.
How has he reconciled (?) How has Moab turned back? he is put to shame
and Moab become a laughing-stock, and an anger to all that are around about him.

MTとLXXを比較して明らかになるのは、MTの本文にある הילילו と חתה（上記私訳枠内）の2語が、LXXではκατήλλαξεν一語で表現されている点である。しかも双方の意味に乖離が見られる。ここで、文献学的な検証が必要となる。LXXにおけるκατήλλαξενのVorlageが何であったのか、を以下に考察する。

実は、同じエレミヤ書48章（LXXでは31章）の20節に、当該のMTの2語（הילילוとחתה）が同様に連続して用いられている箇所がある。ただし、この20節においてはMTとLXXの間には本文上の問題を提起するような齟齬は見いだされない。すなわち、20節においてLXXは、חתהに相当するものとして、συνεπίβηを用いており、he is shatteredと訳すこともできる（他には、to be dishonored, to be ashamed, to be hopelessという訳が可能）ことから、そのVorlageはMTと同様חתהであったことは疑いない。הילילוに相当するものについては「They wail」と訳しうる ὀλόλυξονが用いられており、20節に関してはMTとLXXの間には本文上の問題は見いだされない。いわばLXXのVorlageとMTは20節においては、ほぼ一致していることがうかがわれる。

そのうえでの39節である。Rudolph⁶やBHSの校訂者らは、この20節と39節の間の本文の異同について、MTが20節との調和を図るために39節にהילילוを付加

6 W. Rudolph, *Jeremia. Handbuch zum Alten Testament I*, 12 (J.C.B.Mohr: Paul Siebeck, 1968), 282.

したと説明する。ただ、この説明では、20節と39節の、ほぼ同じ語彙の連続におけるLXXの用語の異同 (συνετριβη と κατήλλαξεν) が十分に納得されえない。むしろ、39節についてはLXXのVorlageは、MTの本文とは異なっていたとする方が妥当であろう。

その前提から類推しうるのは、MTの39節は伝承過程で棄損していた可能性である。それゆえ、LXXのVorlageによる再構成が必要となる。結論から先に述べるならば、39節におけるκατήλλαξενのVorlageが、ןלןのHitpael、pf.であった可能性である。この可能性について以下に検証する。

MTの39節のןלןとןללןについて、前述のように伝承過程における棄損が想定される。本文棄損は二重に生じていることが看取される。当該2語の接尾辞と接頭辞に共通するןがdittographyによるもので、この2語は本来は1語であった可能性が先ず考えられる。それは1語で表記しているLXXとも合致する。そして、ןとלのmetathesisによる棄損の可能性から、この動詞はHitpael完了形であったことが想定される。Hitpaelは、D-stemに属するゆえ、第二根字が重ねられる特徴が、לの重なりに現れる。語中の、は、本文棄損後にmatres lectionisとして挿入されたものと考えうる。よってこの語は、ןלןのHitpaelの完了形3人称複数と考えるのが妥当であろう⁷。

この活用形 (conjugation) は、旧約聖書中に他に例はないものの⁸ヘブライ語のןלןは、LXXのκατήλλαξενと意味上の重なりが見られる。たとえばןלןは、出エジプト32:11で神の怒りを前にしたモーセの仲保の文脈で、同じD-StemであるPiel形で登場し⁹、主の激しい怒りを「宥める」、「和らげる」という意味で

7 P. Jouon, and T. Muraoka, *A Grammar of Biblical Hebrew* (Roma: Gregorian & Biblical Press, 2018), 145-148のHitpaelに関する叙述を参照。

8 I. ןלןについては、Hiphilの用例が、サムエル下13:2と13:6に出てくるが、タマルに対する「恋わずらう」や「病を装う」の意味であり、II. ןלןとは異なる同音異義語である。

9 Hitpael StemはPiel Stemと対応しており、再帰の意味と相互の意味の両方を持つものである。二次的に受動的意味も有する。B.K. Waltke and M. O'Connor, *An Introduction to Biblical Hebrew Syntax* (Winona Lake, IN: Eisenbrauns, 1990), 424-432.

Pielでの用例は、サムエル記上13:12、列王上13:6、列王下13:4、エレミヤ26:19、マラキ1:9、ゼカリヤ7:2、8:21-22、詩編45:13、119:58、ヨブ11:19、箴言19:6、ダニエル9:13などに

用いられている¹⁰。エレミヤ書で、LXXが、そのような意味を持つ Vorlage、הִתְפַּאֵלのHitpael完了形にκατήλλαξενを充てたことは十分に類推できよう。LXXのVorlageでは、モアブが、主の裁きのただなかで、「自らを鎮撫する」(Hitpael再帰的用法)以外に術もなく、背を向けて、恥に落とされ、笑い種になる、という内容において意味上の齟齬も見られない。

結

以上の語義的検討から、「和解」に関するヘブライ語としてהִתְפַּאֵלのD-Stem (Piel, Hitpael)「(怒りを)和らげる」をも考察の対象とすることを提案したい。本稿では考察の対象とはしなかったが、「和解」に関連する語として、ἰλάσκομαιも挙げられるが、LXXマラキ1:9におけるἐξίλασκεσθεの、MTの対応語はהִתְפַּאֵלのPiel Stemであり、捕囚期以降の預言書において「和解」概念を表す語彙として注目するに値しよう。

הִתְפַּאֵלが登場する預言書には、他にゼカリヤ8:21, 22, 7:2がある。しばしば「願ひ求める」と訳されるが、原意は、神の怒りを「鎮める」であり、その帰結として神との間の関係に生起する「和解」のプロセス性を表すと言えないだろうか。

も見られる。

10 LXXは、ἐδεήθηを用いているが、訳のヴァリエーションと考えられる。